

◆ 基礎情報

計画名	「保育・子育て支援実践演習」でのチームアプローチによるリーダーシップ育成
実施責任者	家政学部児童学科 小原敏郎
対象者	家政学部児童学科 3年7名、4年10名
実施期間	2025年4月～2026年1月

◆ 取組み概要

本プログラムは、学内プレールームでの「保育・子育て支援実践演習」履修学生を対象とし、チームアプローチによるリーダーシップ育成を目的とする。2025年度の実績は、地域（主に千代田区）の親子11組、学生は4年生10名・3年生7名であった。

具体的な活動として、3, 4年生の混合チームを編成し、共立リーダーシップ教材やICTツール（記録アプリ、AIボイスレコーダー）を活用しながら、親子活動の“計画－実践－振り返り”を繰り返し行った。このサイクルを意識的に繰り返すことで、このチームとしての目標や、自分たちの強み、課題が明確になった。これにより、改善の方向性を的確に捉え、リーダーシップの成長を実感できるようにすることを目指した。

◆ 取組み全体の流れ

4月：参加する学生へ共立リーダーシップ、チームアプローチについての説明

学生が小グループになり、①チームの方針(コンセプト)：みんながリーダーシップを発揮できるようにチームで大切にしたいことや方針、②チームのルール：みんながリーダーシップを発揮できるようなチームのルール、を話し合う。

4月～7月：前期の活動

チームによる親子活動の“計画－実践－振り返り”の活動（各5回）

3, 4年生の混合チーム（5～6名）が順番に「計画」「振り返り」等の役割を担う。振り返りでは、記録アプリ、AIボイスレコーダー活用し、チームの強みや課題、改善の方向性を明確化する。

9月：後期の初回

ルーブリックに用いて、前期活動の自己評価を行う。

3, 4年生の混合チームによる話し合い（付箋、模造紙を使用）では、前期の課題の洗い出しと後期の目標設定を行う。

9月～12月：後期

チームによる親子活動の“計画－実践－振り返り”の活動（各5回）

後期は、3, 4年生の混合チームによる活動を「振り返り」のプロセスのみに特化され、より多角的な視点から、チームの強みや課題、改善の方向性を明確化する。

1月：「保育・子育て支援実践演習」は共同授業であり、他の授業履修者の前で今年度の活動で得た学びのプレゼンテーションを行う。

◆ 取組みの成果

年間10回の親子活動の取り組みを学生がまとめたスライドを以下に示す。

[https://sites.google.com/kyoritsu-](https://sites.google.com/kyoritsu-wu.ac.jp/sakuranbo/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0)

[wu.ac.jp/sakuranbo/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0](https://sites.google.com/kyoritsu-wu.ac.jp/sakuranbo/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0)

◆ リーダーシップ教育に関する実践

共立リーダーシップの意識づけ、目標設定の活動	初回授業で「共立リーダーシップ実践ガイド」をもとに「共立リーダーシップ、チームアプローチについて」説明を行い、「チームの方針・ルール作成」の設定を行った。また、後期の初回授業では、ループリックによる前期活動の自己評価を行った。また、3, 4年生の混合チームによる話し合い（付箋、模造紙を使用）では、前期の課題の洗い出し、後期の目標設定を行った。具体的には、「一人一人が計画を立てる、活動後の振り返りの際に意見を言う」「4年生が率先して話しやすい雰囲気をつくる」といった内容が話された。
協働活動	協働活動の核となるのは、3・4年生混合チームによる「計画－実践－振り返り」と考えている。記録アプリ、AIボイスレコーダーを用いることによって、課題や改善の方向性が明確になった。また、前期は全過程を混合チームで行ったのに対し、後期は混合チームでの活動を「振り返り」プロセスのみに特化させた。計画・実践と振り返りのチームを分けて行うことで、「実践に没頭する場」と「冷静に分析する場」のメリハリが生まれ、前期以上に異なる視点を持つメンバーから多角的なフィードバックが活性化したと考えられる。
共立リーダーシップの観点での振り返り	目標の設定と共有 ：「ダメと言わず肯定的な言葉で関わる」といった具体的な行動指針をグループ全体で確認できた。 率先垂範 ：学生自身がまず活動を楽しむ姿や、安全に配慮して関わる姿を子どもたちにモデルとして見せることを重視していた。 相互支援 ：学生が振り返りから特定の場所に学生が偏らないように配慮したり、集団活動の動画共有してチーム全体で活動を支え合う連携が図られた。 包容性 ：想定外の遊び方をする子どもの姿を否定せずに受け止める姿勢や、話し合いで全員が発言しやすい環境を雰囲気をつくるなど、多様な個性や意見を尊重する姿が見られた。

◆ 学生の成長に関する総括

本プログラムを通じて、学生は異学年混合チームでの「計画・実践・振り返り」のサイクルを繰り返すことで、共立リーダーシップの着実な成長を示したと考えられる。特に、AIボイスレコーダーや記録アプリ等のICTツールを活用した振り返りは、活動の客観視を促し、課題発見の精度を高める重要な要因となった。特に「目標の設定と共有」では、活動初期の漠然とした関わりから、「肯定的な言葉がけ」や「保護者との積極的な対話」といった具体的な行動目標へと深化が見られた。また、「率先垂範」と「相互支援」の観点では、4年生がモデルを示しつつ、チーム全体で安全と楽しさを担保する連携力が向上した。

一方で、異学年の混合といった点では難しさがやや感じられた。学年や個々の役割を越え、チーム全体を俯瞰して行動することに関して課題が残った。学年を超えたフラットな対話を促進し、全員がチーム全体の成果に貢献するリーダーシップの定着を継続して目指していきたい。

◆ 取組みを通した全体の所感

「計画・実践・振り返り」のサイクルを繰り返すことで、学生の省察の質が著しく向上したと考えられる。当初は漠然としていた子どもへの関わりが、記録や話し合いの可視化に基づく客観的な分析を経て、「肯定的な言葉がけ」や「保護者との対話」など具体的な行動目標へと深化し、実践されるプロセスが確認できた。異学年混合チームにおいて、上級生がモデルを示し、下級生が学び取る「率先垂範」と、互いの配置を補完し合う「相互支援」の関係性が構築された点は大きな成果である。

一方で、チーム運営の課題として、4年生主導の傾向が強く、3年生が主体的に発言できる環境づくり（グループの再編成、座席配置の工夫等）の定着に時間を要した点は、改善事項と考えられる。

◆ 今後の展開

- ・千代田区との連携：学生自身が自治体担当者へ向けて活動報告のプレゼンテーションを行うことで、対外的な発信力を含めた実践的リーダーシップを深める。
- ・次年度への展開可能性：「AIボイスレコーダーと記録アプリを用いた省察サイクル」は、リーダーシップ教育のDXモデルとなり得る可能性がある。この振り返り手法自体の教育効果を可視化し、学内での共有知としていきたい。